

南海トラフ大地震に備える “UITEMATE”との接点

アドバイザーボード 越智元郎



間もなく、東日本大震災から丸2年となる。本稿では震災・津波とわれわれの“UITEMATE”普及活動との接点について考えてみたい。東日本大震災が人々に及ぼした広範なまた深い傷は未だ癒えず、復興も思うように進んでいない。生々しい地震や津波の映像が毎日のようにテレビから流れるということではなくなったが、その後次々と刊行された書籍や報告書の中で様々な角度からじっくりと掘り下げた研究や震災情報から、新しい示唆が得られたように思われる。一方で、特に東京以西の人々の間では、次なる大災害への備えのことが差し迫った脅威となっている。

2012年8月に発表された「南海トラフの巨大地震モデル検討会」の二次報告書によると、南海トラフ大地震の被害は関東から四国・九州の太平洋沿岸等の極めて広い範囲で想定され、最大となるケースの浸水域は約1,015 km²、東北地方太平洋沖地震時の浸水域の約1.8倍、死者は最大32万3000人とされ東日本大震災の約17倍に上ると考えられている。

一方、報告書は津波から素早く逃げたり建物を耐震化したりすることで被害を大幅に減らすことができると強調し、早期避難と耐震化などで6万1000人まで犠牲者を減らせるとした。

最も大きいのは津波からの避難を始める時間であるという。作業部会は地震発生から5分(深夜の場合10分)後に避難を始める「直後避難」、貴重品を持ち出すなどし15分(同20分)後に避難を始める「用事後避難」、津波を見てから逃げ出す「切迫避難」の割合を様々に組み合わせて推計した。すなわち、深夜の津波で20%の人々が10分以内に避難した結果、死亡者数は22万4000人まで減少、全員が10分で避難すると8万5000人に減った。また、自治体が指定する鉄筋コンクリート造りの「津波避難ビル」を有効利用すると、更に5万2000人まで減ると想定している。

これらのデータをみて、筆者はその陰の部分に思いを致さざるを得ない。市民の全員が早期避難をして、津波避難ビルなどを活用してもまだ5万人が死ぬのだ！医療機関や特別養護老人ホームの現場を知る者にはそのことは十分に理解できる。例えば、最大33mの津波が予想されている下田市に1m以上の津波が到達するまでの最短時間は13分、静岡市駿河区は最大13mで最短4分、豊橋市は最大19mで最短9分、志摩市は最大26mで最短6分、尾鷲市は最大17mで最短4分、串本町は最大18mで最短2分、高知市は最大16mで最短16分、佐伯市は最大15mで最短18分、延岡市は最大14mで最短18分となっている。上記のように「10分に避難開始」したとしても、津波に洗われない地点まで高齢者や臥床患者を、人手の少ない夜間などに避難させることは非常に難しい。

高知県の災害医療コーディネータなどは医療従事者が自分の命を失うかも知れないぎりぎりの段階では、自らの避難を優先するべきことを強調し、そのことについて互いを責めてはならないと申し合わせた医療施設もある。

私たちが、患者も私たちも命を失うかも知れないような避難をする段階で、患者・私たちともにライフジャケットを着用しておく必要がある。このことに関して「費用がない」「準備中」という言訳は許されない。患者などを残して行くベッドにしても、浮力に富み、水上でバランスが取れ、ベッドから振り落とされないように患者を固定でき、なおかつ水平方向の流出を防げるような固定具があれば望ましい。

災害弱者の津波避難に頭を痛めている医療や福祉の関係者に対し、私たちの“UITEMATE”の知識と技術は新鮮なインスピレーションを提供できると考えるものである。